

## 研究ノート

児童養護施設のグループワーク実践に  
デジタルポートフォリオを導入する試み

栗山 隆

## 目次

1. はじめに
2. 本研究の目的
3. デジタルポートフォリオと協調学習
4. 対象及びデジタルポートフォリオのフォルダ（生成物）物
5. 評価
6. おわりに

## 1. はじめに

1997年（平成9）, 児童福祉法は制定50年の節目において大幅に改正された。従来の「養護施設」は「児童養護施設」へと名称変更され、その目的に自立支援が加えられた。

社会的養護の意味が問われる中で、近年の子どもの主な施設入所の理由としては、父母の虐待・放任(22.8%), 父母の就労(11.6%), 父母の行方不明(11.0%), 父母の精神疾患等(8.2%)など社会的状況を反映した理由が半数を占めており、自立支援に向けた取り組みに平行して社会的支援に専門的配慮と方法が必要なお子が増加している（日本子ども資料年鑑, 2008: 22）。

児童養護施設に代表されるような居住型の福祉施設は、ここを利用する子ども達にとって生活の場である。また、児童養護施設は、集団単位での営みを余儀なくされる側面を

もっている。それは、人為的に組織化され、構成員としては決して多くはない職員集団が、それをはるかに上回る子ども集団を法の定める施設の設置目的や最低基準に準拠してサービスにあたるという特徴をもっている。さらに、生活の集団性は、集団生活そのものもたらす閉鎖的で排他的な側面をもち、そこで生活をする子ども達にとっては自立（自律）を促す上で重要な安心・安全で快適な生活状況を保証するとは限らない。

したがって、これら居住型福祉施設の特徴ともいえる「集団生活」を消極的に受け止め評価するだけではなく、積極的に活用するための方法が必要である。

## 2. 本研究の目的

筆者（栗山, 1997）はかつてその方法を論じるにあたり「施設養護における集団機能の再評価」を試みた。

その結果、ソーシャル・グループワークを始めとする集団を媒介とした援助技術が、施設養護の実践過程に援用できる可能性を見出した。

しかし、児童養護施設の中にあっては、未だに集団活動（レクリエーションや行事）とソーシャル・グループワークが混同して用いられる場合も多く、直接支援職員（児童指導

員・保育士) が取り組む専門的な援助技術としての実践方法を見いだせずにいた。

そこで、筆者(栗山, 2006)は直接支援職員が取り組むべき専門的な援助過程を考察する上で、児童養護施設の特質ともいえる集団性を積極的に活用していく過程で用いられる諸手段(援助媒体)に着目した。ここでいう援助媒体とは、ソーシャル・グループワークにおいて、「ワーカーがグループの目標達成に向け援助の過程において意図的に用いる多様な諸手段、あるいは道具やチャンネルを総称したもの」である(栗山, 2006:52)。その際、窪田援助媒体論を基礎理論とした。何故なら、窪田援助媒体論は、児童養護施設で生活する子ども達の生活状況に援助媒体を活用していく方法について、単に理論化に資するだけではなく、例証の提示の仕方が実践現場の実務家にとって示唆を与えてくれるものであったからである。

また、施設生活の集団性が意味する施設での生活と社会福祉専門職が業務の遂行過程で駆使する専門的な援助技術として規定する関係を理解し、適切な援助媒体を実践過程に活用することは、人間が人間らしく生きることを制限する現環境を変えていくための視点と道具としての施設職員のあり方を示唆するものであった(栗山, 2006:57-58)。

残された課題は、実践例を示しながら、実践過程に展開の可能性を検証し、児童養護施設に適した実践のあり方を模索する事であった。

社会福祉専門職にあつては、実践内容を記録し、分析・検討し、経験知を蓄積し理論化に資するための取り組みが不可欠であるが、グループ活動の総体を記録することは容易ではない。また、記録は大切な技能として認識されてはいても、その作成に際して、多くの時間がかかる等、必要な時に必要な情報や材料・資料等を即座に取り出し使用することが難しい。筆者は、記録の方法や記録のための

ツール開発の取り組みは実践展開上の優先課題の一つであると認識している。

本稿では、デジタルポートフォリオに着目し、その理論的背景を整理した上で、デジタルポートフォリオを用いた児童養護施設のグループワーク実践において、実際にこのツール作成に関わった3人の職員が作成した成果物をもとに、より効果的に援助媒体を活用できる方法と今後検討していく為の課題について明らかにすることを目的とする。

### 3. デジタルポートフォリオと協調学習

ポートフォリオ(portfolio)はもともと、折り鞆や書類入れ、またはその中に入っている書類のことを指す。例えば建築家や写真家などの専門家が、自分の成し遂げた仕事や成長の軌跡などを、顧客や雇い主に見せるためにファイリングしたものなどである。初等教育の分野においては、「ある学習領域で、子どもの努力や進歩、達成したことについてのストーリーを示している生徒の作品を、ある目的のもとに収集したもの」(Paulson, 1991)である。つまり、子どもの学びについての諸資料の集積であり、その子どもの学びの軌跡、成長の記録であるともいえる(寺西 2000)。

ポートフォリオはその目的に合わせ多様なものが考えられる。例えば、前述のように子どもが自分の学習のために作成したものは、その児童・生徒の学習用ポートフォリオである。また逆に、子どもたちの学習成果を含め、教師の授業実践に関する情報を蓄積・整理したものは、教師用のティーチング・ポートフォリオとなる。児童養護施設の場合でいえば、直接支援職員用ポートフォリオとなる。

ところで、パソコン・インターネットを使って、電子的にポートフォリオを作成(デジタルポートフォリオ)することも行われている。デジタルポートフォリオの利点としては、動

画などをポートフォリオに収集可能であること、学習の変化のプロセスの可視化と意識化が可能なこと、そして、ポートフォリオの蓄積とその共有が可能なこと等を挙げるができる。

例えば、筆者（2003）は、社会福祉実習教育においてデジタルポートフォリオ評価法の可能性について論じた。北澤ほか（2005）は、児童のデジタルポートフォリオを数年にわたって蓄積し、それを教材として活用する実践を行っている。また永田ほか（2007）は、ティーチングポートフォリオの共有のためにブログを用いた実践を行っている。

これらの実践（とくに後者の実践や金子の実践）では、複数の学習者が蓄積・共有されたデータをもとに、協動的に学習を行うことが特徴である。

協調学習について、稲葉（2000）が整理したものを参考にまとめると協調学習の有効性を示唆する理論的背景は、Socio-cultural theory (Vigotsky 1929, 1930), 発達最近接領域 (Vigotsky, 1930), 構成主義 (Bruner, 1966, Dewey, 1916), Self-regulated learning (Flavell, 1976, Schoenfeld, 1987), 状況学習 (Lave, 1988, Lave and Wenger, 1991), 認知的徒弟制 (Collins, 1991), Cognitive flexibility theory (Spiro et. al., 1988, 1991), 観察学習 (Bandura 1971), 分散認知 (Solomon 1993) など多岐にわたっている。これらの理論に基づいて、協調的な学習プロセスを通じた様々な学習効果が期待できる。さらに、ICT (Information and Communication Technology) の発展を契機とし、コンピュータを用いて協調的な学習を支援するシステムの開発・研究が行われている。それらは CSCL (Computer Supported Collaborative Learning: コンピュータを用いた協調学習支援) と呼ばれている (Koschmann et. al., 2002, Stahl et. al., 2006)。

例えば中原ほか（2000）は、教師が互いに

自らの教育実践を開示し合い、その相互作用を通して実践に対する内省を深める CSCL 環境を開発し評価した。また永田ほか（2002）は、教育実習前の大学3年生が、CSCL 環境によって教育実習経験のある上級生や現職教師らと交流しながら、学習指導案等を作成・改善していき、その過程をポートフォリオ化する実践を行っている。

これらの実践は、CSCL 環境を通じて個人の思考を表現し外化させることで、複数の学習者間での議論等の相互作用を可能にし、学習者の知識の構築と理解を促進することが目指されている。

#### 4. 対象及びデジタルポートフォリオのフォルダ（生成物）物

##### 1) 対象・時期

2006年から2007年にかけて札幌市内のソーシャルワーク実践を意識し、かつ施設内にグループワーク担当職員を配置し実践を展開している児童養護施設羊ヶ丘養護園に協力を依頼し、グループワーク担当職員3人と協同で作成したデジタルポートフォリオを対象に実践活動の評価を行った。

##### 2) デジタルポートフォリオ作成の前提

児童養護施設におけるソーシャル・グループワーク援助媒体にデジタルポートフォリオを利用する基本的なねらいは、第1に、園の基本方針、事前評価、計画、実施、事後評価を通してグループワーク担当職員の取り組みを記録する手助けとなることである。第2に、デジタルポートフォリオは、グループワーク担当職員がグループワーク展開に対して自立的な実践に着手しそれを進めていくための道具となりうる。また、グループワーク担当職員に実践の方向と内容を決めさせ、行ったことについて内省を喚起するためにも役立つ。第3に、ポートフォリオによって、教員は、

自分のグループワーク実践を反省できる。プログラムを評価し、その改善に関して意思決定を行うためにも、デジタルポートフォリオは有益である。この基本的なねらいを確認していくため、2006年6月30日10時～12時に羊ヶ丘養護園内において初回の説明会を行い、以後継続的に月1回程度の会議をもった。

その後、2006・2007年度の羊ヶ丘養護園グループワーク事業の目的を踏まえ、必要に応じてデジタルポートフォリオのタイプを選択した。

本来、デジタルポートフォリオ作成・活用の主体は、グループワーク担当職員、全職員、子ども達、保護者、児童相談所、学校機関等と広がりを見せるが、今回は手始めとしてグループワーク担当職員のみでの取り組みとなった。

デジタルポートフォリオが単なる記録集でなくなるためには、情報選択の根拠、すなわち評価のための基準とそれを具体化した規程が必要である。しかし、その基準値や判定規程については、全国児童養護施設協議会等がグループワークについて検討し、基準となるガイドラインを作成し、規程となる標準マニュアルを提示しているわけではない。また、評価項目も十分に吟味されていない。従って、今回は実際に展開している実践内容を構成物として積み上げながら枠組みを作成していく方法をとった。従って構造的な不十分さは否めないものとなった。

### 3) デジタルポートフォリオ利用条件

ポートフォリオがもつ多面的な可能性を広げていく方法の一つとして、視聴覚機器（ビデオカメラ・CD・MDカセットデッキ等）や情報通信機器（コンピューター・ネットワーク・携帯電話等）などの利用が考えられる。

グループワークの活動記録や成果物を、デジタル情報として取り扱う時に役立つマルチメディアとしては、入力データの種類(形式)

として、テキスト、画像（JPEG・PNG）、映像（MPEG1・MPEG4）、音声（WAV・MP3・WMA）、演奏（MIDI）、ホームページ（HTML）等があり、出力データの種類としてホームページ、CD-R、DVDなどがあるが、実際にはテキストと画像（JPEG・PNG）が生成物として構築された。出力データについては、セキュリティの問題から園内のコンピューター1台において作成し、ホームページ変換は行わなかった。作成物は、リムーバブルメディア（ハードディスクやCD-R、DVDなど）に入れて保管した。

コンピューターのSystem/OSは、windows XP、CPUは、Celeron (R) 2.30GHZ、メモリは、248 MBで、一般的家庭で用いられる程度の性能である。

統合ソフト（Microsoft Office）の日本語ワードプロセッサ（ワード2003）、表計算ソフトウェア（エクセル2003）を使用した。

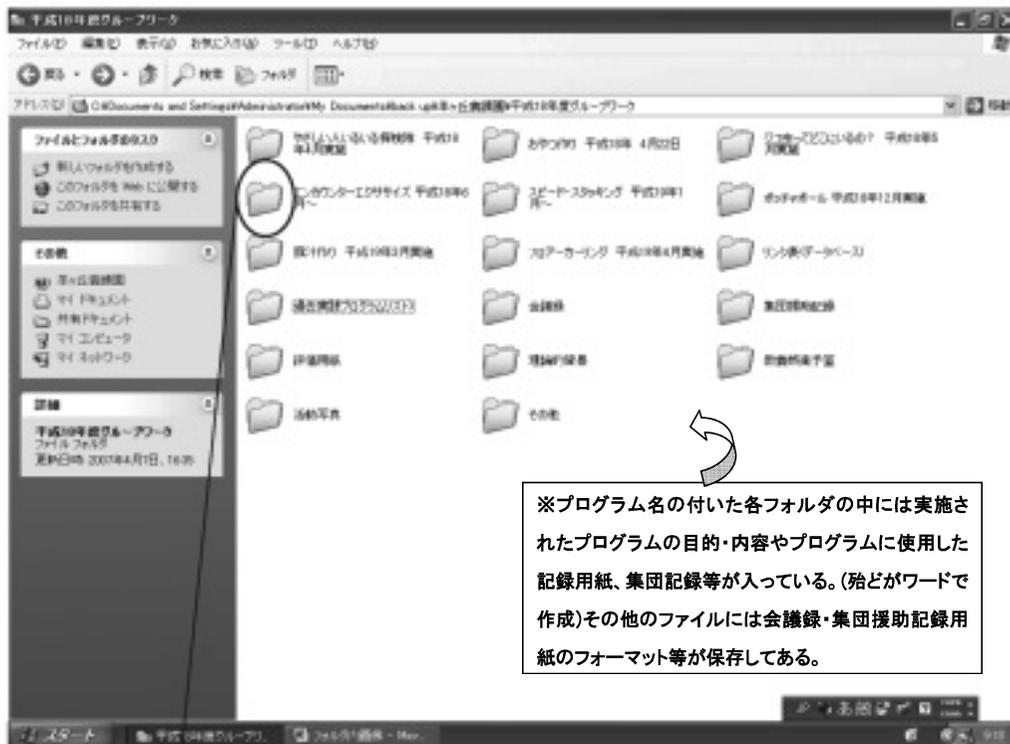
### 4) フォルダーに集積された資料・情報

デジタルポートフォリオ作成活動においては、情報収集・選択・加工・表現・伝達・評価などを含んで成果物が蓄積されるという特徴がある。

今回のグループワーク用のファイルやプログラムを収容するフォルダー内容は、自分たちの活動にとって必要と思われるファイルを集積しながら徐々にカテゴリー化しているため、一定のファイル群が分類出来るようになった時点でサブフォルダーが作られるという展開になった。具体的な成果物は、各フォルダー内に各種のソフトで作成されたファイル（名前を明記）として残していった（表1）。

このフォルダーにどのような成果物を入れていくかについては、グループワーク実践の目的にあわせて、各属性領域ごとに担当職員が相談しながら作成していった。

その結果、平成18（2006）年度、平成19（2007）年度では、表2のようなフォルダー



“エンカウンターエクササイズ平成18年6月～”フォルダ内

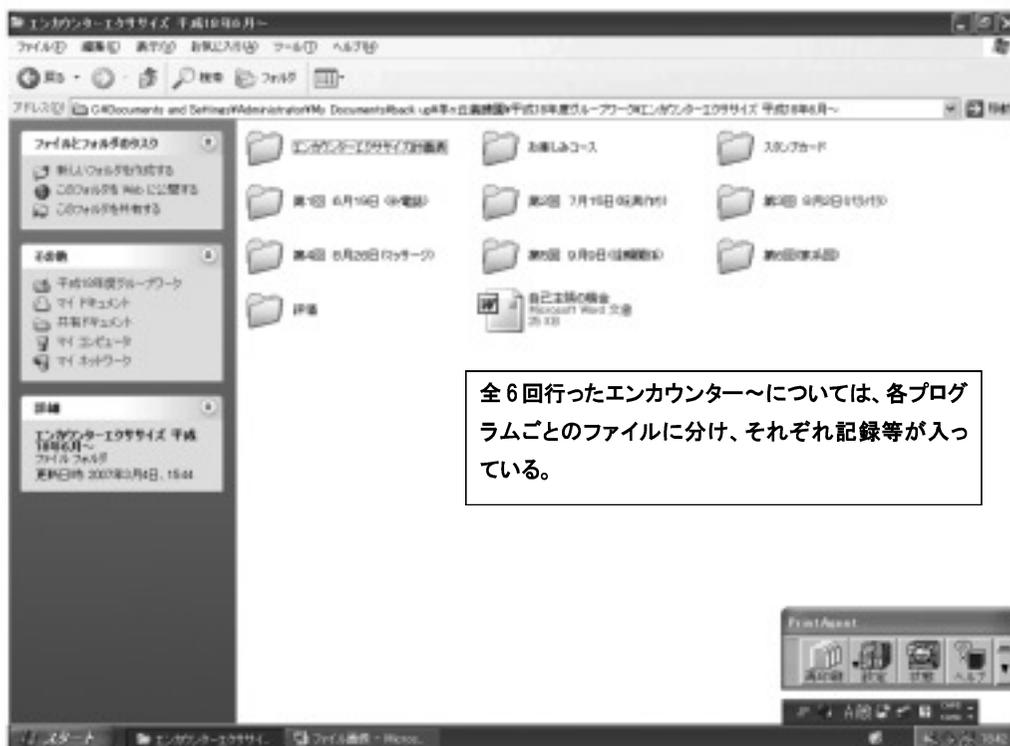


表1 平成18年度グループワークフォルダ内





とファイルのリンク表が作成された。

### 5) デジタルポートフォリオ作成の効果

今回デジタルポートフォリオを作成したことで以下の点について効果が確認できた。

- ① 活動表現の描画化
- ② 再編集
- ③ 持ち運び、閲覧
- ④ 保管場所
- ⑤ 成果物の検索方法
- ⑥ 複製
- ⑦ 評価と成果物の関連づけ

①、活動表現の描画化については、従来当該園で行っていた提出物（グループワーク会議録や報告書等）に加え、活動表現による成果物を入れることが可能となった。そのため、評価対象が、文章表現の成果物に描画表現が加わった。そのことで、体験報告や発表・感想を加えた集団援助場面を再現した表現による成果物へも広がった(表3「活動記録(写真)についてのコメント」)。また、視覚化が容易なため、自分達の活動を見てパフォーマンス評価を行ったり、上手な人の活動と比較し改善したりするためのイメージ作りに役立つ(表4「豚汁作り」)。

②、再編集については、収集しまとめた評価で終了するのではなく成果物を作る過程や収集しまとめる過程でその内容を見直し、修正することによって完成度を高めることができた。2006年度の成果物と2007年度の成果物を見比べると、形成的評価、すなわち現在取り組んでいる活動に活かす評価ができるのがわかる。

③、持ち運び、閲覧については、デジタル情報にすることにより、リムーバブルメディアに入れて軽々と持ち運べた。内容によってはネットワーク経由で関係施設・機関の職員や利用者、さらに関係した協力者等々多くの人に見てもらえることもできる。また、ポート

フォリオをサーバに入れて学園内ネットで公開すれば、特別な機会を設けなくてもグループワーク活動に関する担当職員が作成したファイルを他の職員も自由に見ることができ、次年度担当者が交代したとしても効果的な引き継ぎや、職員同士の相互啓発に基づく活動を促進できる。

④、保管場所については、作成物の置き場所が大きな課題となる。作成物の大きさによって園内の職員室の隅に整理棚を設けたり、コンテナを並べたりすることが必要になる事があるが、デジタル情報にしておく、場所をとらずに保管できる。ただし、パーソナルコンピューター内に保管してあるデジタル情報については、自由に閲覧できるファイルとセキュリティが必要なファイルに分け、セキュリティが必要なファイルは別途保管した。

⑤、成果物の検索方法については、検索機能を利用し、成果物が増加しても必要な情報を簡単に探し出せようにした。そのため、成果物を貯め込むだけでなく、グループワーク活動学習資料の一つとして共有しながら再活用した。

⑥、複製については、職員が自宅にポートフォリオを持ち帰った場合でも、その完全な複製を園内(職員室)に残しておいた。また、制作途中のものを別ファイルに保存し、制作の過程を記録として残すことも容易となった。

⑦、評価と成果物の関連づけについては、ハイパーリンク機能を利用しながら、評価に関する記述が具体的にどの成果物のどの部分に着目したのかを関連づけて示した。この点は今後成果物と評価をめぐる客観性や信頼性、用語間の結びつきや構造を検討する上で役立つと思われる。



表3 活動記録(写真)についてのコメント  
選んだ写真は「影絵」のひとつ。

一番右はワーカー。立っている女の子はSちゃん。座っている子の中の右にるのがAちゃん。左にるのがYちゃん。

影絵コンテストを開催するに当たり、このグループは影になるものを考えつつも、先にシナリオをSちゃんが作り(浦島太郎の話)、それにあわせるようにお話の中に出てくる亀や、浦島太郎や亀をいじめる子ども達を画用紙や割り箸で作成していた。

写真の場面はちょうど砂浜に亀が現れたシーンで、自分の頭がスクリーンに打ち込まれないよう頭を低くしているAちゃんとYちゃんがいる。

リーダーはSちゃんであったが、おっとりしたAちゃんはSちゃんに言われるとおどろこうとする。となりはそれを見守るYちゃん。

台の左側にあるのは海の中を表現して書いた透明なビニール袋。亀が太郎を乗せて海の中を泳ぐシーンになったらスクリーンに広げる。透明の袋にマジックで海藻や岩を描いたものでスクリーンを見ている観客側にはマジックの色が写る仕掛け。

スクリーンには白いシーツを使用している。ぴんと張った状態にするのに、バドミントンで意図するボールを用いて、紐で引っ張っている。

この影の映るスクリーンが観客の子ども達にはおもしろいようで、このグループが発表している最中でも、数人がスクリーンに近寄り、Sちゃんはむっとしている。

この活動を昼間に行っており、写真には写っていないが、会場の体育館の窓の両サイドにシートを釘で止め、何とか影ができるように準備した経緯があった。

(出典：平成18年度羊ヶ丘養護園グループワーク集団援助記録より引用)

## 5. 評価

羊ヶ丘養護園では、グループワークをコノブカの定義を参考に、「子どもたちの集団の相互作用を活用し、子どもたちがより社会的に機能していけるよう援助していくこと」が基本的なねらいとされ、グループワーク担当職員は、このねらいに基づいて日々実践を積み重ねている。

しかし、重要なことは、単に実践を繰り返すだけではなく、成果を適切に評価し、その評価に基づいた修正・改善を定期的に加えながら、日々の実践を更新することである。

そのためには、「目標に準拠した評価(いわゆる絶対評価)」、「集団に準拠した評価(いわゆる相対評価)」、「自己という個人に準拠した評価(いわゆる個人内評価)」が必要となる。

「目標に準拠した評価(いわゆる絶対評価)」



表 4 豚汁作り

写真右：小学生女子，右側の小学生男児に包丁の使い方を教えている。小学生男児も女児に教えられたようにして，豆腐を上手に切っている。

写真中央：食材を他の人に渡しながら，高1男児，小学生2人のやり取りの様子を見ている。

写真左：中学生女子，ジャガイモの皮むきをしている。グループの中での役割を見つけ，こなそうとしている。

(出典：平成18年度羊ヶ丘養護園グループワーク集団援助記録より引用)

を行うためには，3つのレベルでの評価尺度が必要であるといわれている。それは，「評価の観点」，「規準」そして「基準」である。

「評価の観点」とは，本来「子どもにつけたい力の領域」を示したものであるが，今回は冒頭でも述べたように職員用のワークズ・デジタルポートフォリオであるので「グループワーク担当職員（以下，担当職員）につけたい力」として置き換えた。

文部科学省は，「評価の観点」として教科学習を行う場合の原則について「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」という4つの観点別評価を行うことを求めている。

児童養護施設の担当職員が取り組むグループワーク実践に，果たしてこの観点別評価がどこまで援用できるかについては疑問が残るが，実践内容を評価する上で，どのような観

点をもって評価していくのかということでは検討が必要である。今回のグループワーク実践では，「評価用紙」（表5）を活用し，2007年に1回，2008年に1回，合計2回記入してもらった。ここでは，評価の観点として「目標・目的」「計画」「資源活用」「知識・理解」「継続性」「自己の振り返り」という6つの観点別評価を設定した。

次に，観点別実践状況の評価が効果的に実施されるように，目標の実現状況を判断するためのよりどころとして「評価規準」が求められる。ここでいう「評価規準」とは，評価観点によって示された「担当職員につけたい力」をより具体的な成長・変容の姿として文章表記したものである。

これらの評価規準を作成する時は，それぞれの展開場面で固有の内容と素材，そしてつけたい力を関連づけて文章表現を工夫するこ

表 5 GW 援助媒体活用の実践を振り返って試みての評価

羊ヶ丘養護園 氏名 ( )

★ 各自のこれまでの活動に対することを下記の評価規準にそって評価してください。

- ① それぞれの評価規準のA、B、C、Dの文章をよく読んで下さい。(レベルはA優、B良、C可、D不可)。
- ② 過去の活動を振り返りながら、活動全体の内容がどの規準のどの段階にあたるか判断してください。
- ③ あてはまらぬと思うレベルのA、B、C、Dに ○ をつけてください。
- ④ 記述欄には質問に対する答えやそれぞれに対する感想を自由に記入してください。(なるべく具体的に)

	目標・目的	計画	資源活用	知識・理解	継続性	自己の振り返り
目標の説明	この活動の目標・目的や自分たちが定めた目標・目的を考える。	共通課題についてまとめたり、次回に繋げるための計画全体を考える。	活用可能な資源(援助媒体)について適切に活用しようとする。	学んだ事柄を覚えていて、役立て方について検討することができきる。	継続性の大切さについて考える。	自分の態度を振り返り、自分を高めようとする。
各レベルの内容	A 絶えず目標・目的と照らし合わせ、課題を見出し、自ら計画・実行・評価することが出来る。 B 自分なりに意識でき、目標・目的と照らし合わせ、課題を見出し、自ら計画・実行・評価することが出来る。 C なかなか意識できず、不十分だった。 D 全く出来なかった	A 事実関係や結びつきについて、仲間や関係者が納得するよう計画を考えることが出来る。 B 一応の納得が得られるよう計画を考えることが出来る。 C なかなか納得が得られず不十分だった。 D 全く出来なかった	A 計画したことを実現するためにあらゆる資源を見出し、適切に活用した。 B 計画したことを実現するために資源を見出すことは出来た。 C 与えられた資源について活用できた。 D 全く出来なかった。	A 学び得たことがらのほとんどについて説明が出来る。 B 学んだ内容の意味を大部分は理解している。 C 覚えようと努力する姿勢がある。 D 全く理解できなかつたし、知識として役立てられない。	A 将来を考えて継続していくには何が必要か自分なりの考えをもっている。 B 特に継続性に対する考えはないけど、引き続き活動はできる。 C 誰かが引っ張ってくれれば、継続できる。 D 継続できない。	A 自分を振り返る道具(記録など)を活用して自分の変化を説明出来る。 B 自分を振り返る道具(記録など)に記入して残すことが出来る C 毎回ではないが何かしが残っている。 D 振り返ることが出来ない
記述欄						

とが求められる。

例えば、「評価用紙」(表5)「目標・目的」の中に整理される評価規準としては「この活動の目標・目的や自分たちが定めた目標・目的を考える」というような文章表記になる。この規準は、さらにグループワーク実践に引きつけての観点別評価(例えば、「グループ」「メンバー」「プログラム」「相互援助システム」「グループダイナミクス」「問題解決の程度」等)も必要になってくるが今後の継続課題となっている。

最後に評価規準で示したつきたい力を、どの程度まで習得しているかを具体的に明示しなければならないが、これが「評価基準」である。「評価規準」設定後の目標達成の度合いを判断するための指標や尺度に相当する「評価基準」については、習得状況の程度を明示するための指標を、数値(1, 2, 3, 4)、記号(A, B, C, D)または文章で表記する必要がある。

例えば、「評価用紙」(表5)「目標・目的」の中に整理される評価基準としては、「A、絶えず目標・目的と照らし合わせ、課題を見出し、自ら計画・実行・評価することが出来た。」、「B、自分なりに意識でき、目標・目的と照らし合わせ、課題を見出し、自ら計画・実行・評価することが出来た。」、「C、なかなか意識できず、不十分だった。」、「D、全く出来なかった」となる。この際には、必ず子どもたちの実態から課題を抽出し、課題を整理しながら目標・目的を再考していく視点が不可欠であった。

さらにこの下に「記述欄」を設定し自由表記してもらった。

「集団に準拠した評価(いわゆる相対評価)」は、これらを評定するとき用いられ、記述欄は、「自己という個人に準拠した評価(いわゆる個人内評価)」として取り扱われた。

今回試験的に評価用紙を用いて実践評価を行ったが、次年度に向けて有効活用されている。

くためには、この絶対評価、相対評価、個人内評価の長所・短所を理解し、それぞれの評価による相互補完的な関係によって解釈したり、評価目的に応じて採用する評価自体を変える必要がある。

## 6. おわりに

児童養護施設の職員用のワーカーズ・デジタルポートフォリオばかりではなく、施設の子ども達も参画し、子ども自身がその子なりの評価基準を設定し、子どもが自分なりの基準で援助媒体を選択しながらデジタルポートフォリオを作成するために個々人に応じた「自己選択成果物デジタルポートフォリオ」が望ましいと考える。

児童養護施設という複雑で多様な集団養育の場を考える時、全てが子どもも主体でよいということにはならず、子どもの安全や倫理的な問題や情報のセキュリティ等も考慮すると、内容によっては職員主導にならざるを得ないところもある。その際、職員自身の取り組みもさることながら、評価したものをふり返る力が必要となる。これらの点について、高田ら(2005:162)は、ポートフォリオを用いた健康教育の実践において「今後の方向性としては、評価規準・基準を用いて評価した「ふり返る力」の形成が、学習後においても日常生活の中で生かされ、生活の改善や行動変容につながっていることを検証することが重要」とし、「ふり返る力」の評価規準・基準を用いることにより自己改善に向かう可能性を示唆している。

今後の課題としては、以下があげられる。

- ① デジタルポートフォリオのさらなる集積、概念のフォルダ化
- ② グループワーク担当職員間での共有を図るための様式や使用方法の整理
- ③ 担当職員以外の直接支援職員も活用できるよう発展的系統性のあるファイルの作成

と共有方法

- ④ 業務省力化のための方法
- ⑤ 成果や改善が見られた内容や方法を活用したスーパービジョンのあり方
- ⑥ ワーカー・メンバー協働型参加プログラムの可能性

デジタルポートフォリオを使用したグループワーク援助媒体の記録による情報の蓄積と活用は、園全体の取り組みに結びついた職員、子ども達の協働作業の拡充によって、要養護的課題の達成という枠組みの中で、ソーシャルワーク・ウィズ・グループスの機能的キャパシティの確保と強化に貢献できるかもしれない。これに関して促進的ファクターとして考えられるのは、従来の方法論の構造を子ども達の新たなニーズに段階的に適応させること、グループワーク実践の質を改善すること、居住構造、職員構成、力量全体に調和した階層的实践コンセプトをつくることである。

今後は、さらにグループワーク実践を積み重ねる中で、デジタルポートフォリオ評価法の理論的構築を継続したいと考えている。

#### [注]

- (1) 本報告は、2006・2007年度北星学園大学特定研究費の補助を受け取り組んだ活動の一部である。本学の横山稷教授、金子大輔講師に助言を頂いた。記して感謝申し上げる。
- (2) この研究を進めるにあたり、児童養護施設・羊ヶ丘養護園の同意と全面協力、並びに、本文中の図表掲載の許可を頂いた。また、個人情報保護の観点から表中に登場する子どもの顔をプライバシー保護している。

#### [文献]

- 社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 日本子ども家庭総合研究所編(2008)『日本子ども資料年鑑2008』KTC 中央出版。
- 栗山隆(1997)「施設養護における集団機能の再評価——集団主義養護論とグループを媒介としたソーシャルワーク——」『ソーシャルワーク研究』Vol.22, No.4: 30-36。
- 栗山隆(2006)「ソーシャルグループワークの児童

養護施設への適用——援助媒体の理解と活用——」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』(弘前学院大学) 6: 51-58。

- Paulson, F. L. Paulson, P. R. and Meyer, CA. (1991, February). "What Makes a Portfolio a Portfolio?" *Educational Leadership*, pp. 60-63.
- 寺西和子(2000)「ポートフォリオ評価研究の視点から」『教育工学関連学協会連合第6回 全国大会講演論文集』(第一分冊) 49-50。
- 栗山隆(2003)「社会福祉実習教育に関する一考察——デジタルポートフォリオ評価法の可能性——」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』第3号: 39-50。
- 北澤武, 加藤浩, 赤堀侃司(2005)「用語間の関係の強さに着目したデジタルポートフォリオ検索支援システムの開発と評価: 先輩学習者のポートフォリオを用いた授業実践を事例として」『日本教育工学会論文誌』vol.29(1): 1-9。
- 永田智子, 鈴木真理子, 稲垣成哲, 森広浩一郎(2007)「現職教師がブログでつくるティーチング・ポートフォリオ」『日本教育工学会論文誌 31』(Suppl.): 161-164。
- 稲葉晶子, Supnith Thepchai, 池田満, 溝口理一郎, 豊田順一(2000)「学習理論に基づく協調学習グループ構成のための学習目的オントロジー」『電子情報通信学会誌』vol.83(6): 569-579。
- Vygotsky, L. S. (1929) "The problem of the cultural development of the child." *J. Fenetic Psychology*, vol.36, pp.415-434.
- Vygotsky, L. S. (1930) *Mind in society: The development of the higher psychological processes*. Harvard University Press, Cambridge, MA. (republished 1978)
- Bruner, J. (1966) *Toward a Theory of Instruction*, Harvard University Press, Cambridge, MA.
- Dewey, J. (1916) *Democracy and Education*, The Macmillan Company.
- Flavell, J. H. (1976) "Metacognitive aspects of problem-solving", in *The nature of intelligence*, ed. L. B. Resnick, pp.231-235.
- Erlbaum, Hillsdale, NJ. Schoenfeld, A. (1987) *Cognitive Science and Mathematics Education*, Erlbaum Associates, Hillsdale, NJ.
- Lave, J. (1988) *Cognition in practice: Mind, mathematics and culture in everyday life*, Cambridge University Press.

- Lave, J. and Wenger, E. (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press, MA. (佐伯胖(訳) (1993)『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書，東京)
- Collins, A. (1991) “*Cognitive apprenticeship and instructional technology,*” in *Educational Values and Cognitive Instruction: Implications for Reform.*, eds. L. Idol and B. F. Jones, L. Erlbaum Associates, Hillsdale, NJ, 1991.
- Spiro, R. J., Coulson, R. L., Feltovich, P. J., and Anderson, D. K. (1988) “*Cognitive flexibility: Advanced knowledge acquisition ill-structured domains,*” Proc. Tenth Annual Conf. of Cognitive Science Society, pp.375-383, Erlbaum, Hillsdale, NJ, 1988.
- Spiro, R. J., Feltovich, P. J., Jacobson, M. L., and Coulson, R. L. (1991) “*Cognitive flexibility, constructivism, and hypertext: Random access instruction for advanced knowledge acquisition in ill-structured domains,*” *Educause Review*, No.5, pp.24-33.
- Bandura, A., (1971) *Social Learning Theory*, General Learning Press, New York.
- Salomon, G. (1993) *Distributed Cognitions*. Cambridge University Press, MA.
- Koschmann, T., Hall, R., Miyake, N. eds. (2002) *CSCL 2: Carrying Forward the Conversation (Computers, Cognition, and Work)*, Lawrence Erlbaum Assoc Inc.
- Stahl, G., Koschmann, T., and Surthers, D. D. (2006) “*Computer-Supported Collaborative Learning.*” in *The Cambridge handbook of the learning sciences.*, ed. R. K. Sawyer, Cambridge University Press, pp.409-425.
- 中原淳，西森年寿，杉本圭優，堀田龍也，永岡慶三(2000)「教師の学習共同体としてのCSCL環境の開発と質的評価」『日本教育工学雑誌』24(3)：161-171.
- 永田智子，鈴木真理子，浦嶋憲明，中原淳，森広浩一郎(2002)「CSCL環境での異学年交流によるポートフォリオ作成活動を取り入れた教員養成課程の授業実践と評価」『日本教育工学雑誌』26(3)：215-224.
- 堀口秀嗣，荒義明，田中秀典，田中宏明，浅野弘(2002)「デジタルポートフォリオ・デジポケッツの機能と授業での活用」日本科学教育学会研究会研究報告，VOL.16，No.4：33-38.
- 村川雅弘編著(2001)『「生きる力」を育むポートフォリオ評価』ぎょうせい，67-72.
- 高田しずか，渡邊正樹，小松良子，佐々木和佳子，細川文恵，江口邦子，田村沙弥香，中山志保子，酒井都仁子，福島静恵，田村朋子，岡田加奈子(2005)「ポートフォリオを用いた健康教育における評価規準・基準の検討」『千葉大学教育学部研究紀要』第53巻：162.

[抄録]

## 児童養護施設のグループワーク実践に デジタルポートフォリオを導入する試み

栗 山 隆

筆者はこれまで実践を積み重ね記録ファイルの「フォルダ化」という方法を用いてデジタルポートフォリオ評価法の開発可能性を探ってきた。ポートフォリオ評価は、本来学生（子ども）一人一人の成長プロセスを教師と学生が協調学習し共同評価することにより、学生の自尊感情や自信、学習意欲を育むこと、自己評価や他者評価によってメタ認知能力をつけるのに有効であるといわれ、デジタルポートフォリオは、成果物をデジタル化したものである。ここでは、児童養護施設でグループワーク実践にデジタルポートフォリオを導入する試みを報告する。ただし、今回は施設の子ども達を作成したポートフォリオではなく、グループワーク担当職員が作成した職員のグループワーク実践に関する情報を蓄積・整理した職員用のワークーズ・デジタルポートフォリオの報告である。